

世界中の“障がい”のある人々を支援し、一人でも多く笑顔にしたい。



宮嶋 愛弓

AYUMI MIYAJIMA

赴任地



ベトナム

赴任地での職種(活動分野)
作業療法士

大阪府大東市
四條畷学園大学 リハビリテーション学部 講師

高校2年の春休みに、姉と2人でベトナム縦断旅行に挑戦。路上で物乞いをする障がいのある子どもたちを見て衝撃を受け、作業療法士になることを決意。2007年にJICA海外協力隊としてベトナムへ渡る。現在、四條畷学園大学で講師として後進の育成に携わり、在日ベトナム人のための活動にも尽力している。

子どもに、世界に、関われる、作業療法士の育成を。

宮嶋さんが、大学に入学してきた一年生に必ず話すことがある。それは、自分が作業療法士となった経緯とJICA海外協力隊での経験、そして作業療法士が海外で活躍できる仕事であること。宮嶋さんの話を聞いて、国際協力に興味を持つ学生も少なくない。

現在の日本では、少子高齢化のために高齢者のリハビリテーションが中心だが、ベトナムをはじめとする途上国では障がいのある子どもたちを対象にした発達領域のニーズが非常に多い。「自身の経験を

生かし、子どもにもしっかり関わっていける作業療法士を育てるとともに、海外に興味を持った学生が一步を踏み出す後押しをしていきたい」と宮嶋さん。

海外からの支援もあってベトナムに作業療法士の学校ができ、昨年初めて卒業生が誕生した。「将来、両校で協定を結んで、スタディツアーやシンポジウムなど、教員や学生の交流をしていきたい」。その架け橋となるのも、今後の目標の一つだ。

相手への理解と信頼がなければ、正しいことでも伝わらない。

宮嶋さんが配属されたのはホーチミン市障がい児整形外科リハビリテーションセンター。当時のベトナムには作業療法士がおらず、理学療法士への作業療法の技術伝達と環境整備が目的だ。赴任当初、子どもたちが嫌がっているにもかかわらず訓練をされている姿に衝撃を受けた宮嶋さん。子どもの気持ちを尊重し、主体的にできる訓練をするべきだと思ったが、外部から来た若い外国人が下手なベトナム語で伝えても受け入れてもらえないと考え、まずは信頼関係を築くことを意識。日本での対応方法(支援方法)とは異なると感じて否定せず、作業療法的手段や目的、自分の向き合い方を根気よく示していった。環境面や物理面を変えるより人を変えていくことが、2年間で一番苦勞し、難しかったことだ。



地域の支援学校での音楽療法



クチ郊外にて作業療法での感覚遊び



障がいのある子どもたちとの交流

楽しみながら挑戦しようという姿勢が、現地の人々に受け入れられた。

現地でも1つ大きなショックを受けたことがある。それは、金銭的な問題などでセンターにすら来られない子どもが大勢いたことだ。ここで活動しているだけでは駄目だと、休日を使って郊外に行きボランティア活動を始めた。また、患者が少ない時は併設の障がい児デイケアに行き、寝たきりで過ごす子どもたちのために発達段階に応じた介助方法などを指導していった。プライベートでは、同年代の同僚たちと遊んだり、食事や旅行に行ったりとベトナムの生活を満喫。語学もどんどん上達していった。何事にも積極的に挑戦し、トラブルさえも楽しみながら、現地に溶け込もうとするうちに、現地の人々から受け入れられるようになった。同僚たちも宮嶋さんの言葉に耳を傾けるようになり、子どもたちも笑顔で訓練できるようになっていった。

自分の経験を伝えていくことで、支援はもっと広がり、深められる。

帰国後、宮嶋さんは臨床の現場でベトナム難民在住地域での訪問リハビリに携わる傍ら、大学院に進学した。活動中に国際的に活躍するためには学歴が必要だと知り、もっと深く勉強し直したいと考えたからだ。当初は研究と臨床に専念するつもりだったが、縁があって大学で学生たちに作業療法を教えることに。そこで、人を育てることの素晴らしさと楽しさを知り、教育の道へ進むことを決めた。「ベトナムでも教えるということはやってきたが、それは作業療法士ではなく理学療法士に対してだった。また、自分が目の前の1人を支援するよりも、作業療法士を100人育てればより多くの支援ができる」と、より大きな社会貢献につながると考えたからだ。



たくさんの出会いと支えがあって今の自分がある、その恩返しを。

勤務先の大学以外でも、専門学校・自立生活支援センターでの講師、ベトナム語の通訳・翻訳、就労支援作業所での支援と、語学と専門的な知識・技術を生かして多忙な毎日を送っている宮嶋さん。「フルタイムで働きながら3人の子育てをしていると話すとき驚かれますが、ベトナム人から教わった“なんとかなる”の精神で楽しみながら乗り越えています。家族を大切にすることもベトナムで学んだことの一つ。自分自身の人生や仕事が幸せでないと、他人の幸せまでは考えて支援できない。これからも自身の経験からどのように社会貢献できるかを常に考えて行動していきたい」。そんな宮嶋さんを動かす原動力、それは「ベトナムで支援してもらったから今の私がある、その恩返しをしたい」という、感謝の想いだ。

上司に聞く!



四條畷学園大学
リハビリテーション学部 教授
銀山 章代さん

視野が広く、様々な視点から物事を見ることができる宮嶋さん。海外での経験は、価値観の多様性を受け入れる根幹となり、作業療法士としての対象者を捉えることの幅広さと豊かさにつながっていると感じます。これからも、作業療法士を目指す学生たちにその貴重な経験をぜひ伝えてほしいです。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 何でもやってみよう、楽しもうの精神で!

任地では新しい出会いとともに、思いもよらない状況や様々なトラブルが待ち受けているかもしれませんが、でも、それらを不満に思うのではなく楽しむぐらいの気持ちで、目の前を焦らず慌てず諦めず一つひとつ進めていってください。2年間で得られる経験は、帰国後、想像もつかない自分へとつながっていきます。